

2013年度 カンボジア・スタディツアーでの学生の学び

木下 照子*・福岡 悦子

新見公立大学看護学部

(2014年11月19日受理)

2013年度の国際交流・国際貢献活動として「カンボジア・スタディツアー」を実施した。研修は州立病院・アンコール小児病院、CVSG (Cambodia Village Support Groupカンボジアの村を支援する会) による自立村・自立支援センターやトンレサップ湖・アキラ地雷博物館の見学を行った。主な活動は町の小学校で子どもたちとの交流や自立支援センターで学生との交流であった。自立村では農園でジャックフルーツの植樹作業も行った。また開発途上国であるカンボジア (シムリアップを中心) の医療、文化、生活に触れ、自然環境を学び、見聞や体験の中からカンボジアの抱える課題や日本との違いについて考えることができたので報告をする。

(キーワード) カンボジア, 発展途上国, 国際交流, 国際貢献

はじめに

カンボジアの国は、日本の外務省のカンボジア基礎データによると、面積 18.1 万 km²、人口 14.7 万人 (2013 年政府統計) で公用語はクメール語、仏教を信仰するクメール人の王国である。国民の 90% がクメール人である。2012 年の GDP は成長率 7.3% であり、年々順調な経済成長を遂げつつある¹⁾。1970 年代にポルポト政権による大量虐殺や内戦によって国内は混乱したが、1993 年、立憲君主制の新生カンボジア王国が誕生し、経済の復興が進められている。国民の 8 割が農業従事者といわれるが、さらに農業・服飾製造業・観光業や建設業も活発化され経済成長率と共に農村部と都市部の経済格差が課題である。特に水、電気、トイレへのアクセスは郡部において悪く、郡部と都市との差が大きい。子どもたちの中にもクメール語が書けない子もいるような現状である。今回のスタディツアーによって教育や医療が日本との大きな違いを実感することができた。施設訪問や見学・活動を通して国際交流・国際貢献活動について考え、カンボジアの遺跡・人々の生活文化を通して学生のそれぞれの思い、感動、衝撃をそばで感じることができた。さらに異文化体験の中から、多様な価値観や人間観を理解し人間としての成長が見られたので報告する。

1. 研修準備と出発まで

1. 5月～10月 カンボジアスタディー研修への呼

びかけを掲示で行った。

場所：看護科1年、2年教室 1号館及び3号館学生
掲示板

2. 7月 夏期休暇前に看護科1年、2年教室において
研修参加への呼びかけと夏期休暇中にカンボジア
スタディー研修について家族に相談するよう投げかけ
を行った。

3. 10月 参加申し込みを掲示し、更にスクールネッ
トを活用し参加者を募った。

4. 11月

第1回目の集会

1) カンボジアスタディー研修についての概略説明

2) 過去の研修の文献や写真を活用し研修内容を紹
介した^{2)~7)}。

3) 町の小学校で子どもたちとの交流の企画運営など
過去の記録を参考に今回の交流内容について検討し
た。

第2回目の集会

1) 担当ツアー会社から行程及び費用、参加にあたり
注意事項の説明をした。

2) 研修についての準備、及びマナーなどを話し合っ
た。

5. 12月

1) 赤尾の本を2冊渡し、回し読みして事前学習をし
ておくこととした⁸⁾。

2) 町の小学校で子どもたちとの交流の企画運営につ
いて確認し必要物品の準備をした。

*連絡先：木下照子 新見公立大学看護学部 718-8585 新見市西方1263-2

3) 再度研修についての約束事などの確認をした。

6. 研修期間

2014年1月7日から1月11日の5日間

7. 参加者

学生 看護学部生 1年5名 2年4名(男子学生2名を含む)

教員 2名(看護学科)

II. 研修内容と学生の学び(表1)

1 アンコール小児病院見学

1999年2月にアジアの恵まれない子どもたちの支援を目的とし設立された。現地の人たちへの医療や衛生教育はもちろんであるが、医療スタッフが医療診療・運営活動ができることを目指し、NPO法人フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーがプロジェクトしたものである。病院の敷地内にはビジター用の施設がありビデオやパネルで病院の活動が紹介されている。またオリジナルグッズ、カンボジア製品が販売されていた。

2 州立病院訪問

カンボジアでは下痢を主な症状とする消化器感染症の赤痢、腸チフスであった。またウイルス感染や蚊の媒介によってマラリア、テング熱、日本脳炎がある。日本で

は発症することの少ない疾患が多いのが特徴である。また性感染症も多く、AIDSは人口の3%以上がHIV陽性といわれている⁹⁾。疾患は急性胃腸炎、栄養失調、肺炎、結核などであり最近は交通事故、糖尿病などが増加してきているとのことであった。フランス、ベルギーなどの多くの国から支援を受けながら年々改善しているようであるが、病室内や救急処置室など医療体制は日本との大きな違いが伺えた。見学は一部のみでよく理解できないことも多かったがツアー参加者は関心が高かった。

3 町の小学校で子供たちとの交流

町にある大きな小学校にアポイントなく行った。近くにいた男性教員は少し驚いていたようであるが、子供たちを集合させ整列させた。「日本の小中学生に関心の高いアニメやファッション」をポスター2枚で紹介した。その後、縄跳び、ドッチボール、ダンスのチームに分かれて交流をした。

4 アキラ地雷博物館

CVSGの高田さんが丁寧に学生の質問に答えながら説明をして回り、みな真剣に聞き入っていた。ビデオを見て地雷除去に生きるアキラの人生から様々な思いを感じた。

5 CVSG自立支援センター

日本に来るための学習している若者と私どもとで4グループに分かれて交流を行った。お互いに関心ごとから話し合ううちに盛り上がってきたようであった。センターの入口に、倉敷市大高地区からの援助の看板を見かけ、カンボジアと日本の交流や日本からの支援に気づくことができた。

6 CVSG村の子供たち

子どもたちが生活している村の見学と説明を受け、元気に遊んでいる子供たちに出会うことができた。時間があれば交流ができたと思うが短時間であったため見学に終わった。

7 トンレサップ湖や遺跡見学のカンボジア全体感想

トンレサップ湖は東南アジア最大の湖であり、雨季と乾季で3倍もの大きさに変化する。遊覧船に乗って水上集落の様子を見学できた。豊かな漁場を活用し生活する湖の水上集落の小中学校・バッテリー屋・民家などの生活空間も見ることが出来た。

東南アジア最大級の石造建築アンコールワットの見学のために早朝ホテルを出発したが、遺跡見学の最高スポットは世界中からの観光客でいっぱいであった。場所を変えてご来光を見ることができてよかった。その後ガイドの説明で第1回廊から第3回廊のレリーフの説明を受け、遺跡の広大さや歴史を学んだ。その他アンコール・トムやオールドマーケットなど多くの遺跡や生活に触れることが出来た。

表1 研修内容と学び

1. アンコール小児病院見学	<p>1) 病気について基礎知識を教え、掃除の仕方や野菜の育て方料理の仕方など日常生活の基本を教えている。</p> <p>2) 無料でない医療を受けられない人がそれだけいるということであり医療のあるべき姿のように感じた。</p> <p>3) 子どもの死因として下痢、肺炎、はしかであるが日本では下痢やはしかで命を落とすことはない。</p>
2. 州立病院見学	<p>1) 国内に4つある、かなり大きな病院であるが日本の医療にはほど遠い。</p> <p>2) 病棟は24棟程度、産婦人科、糖尿病疾患、呼吸器疾患、HIV、整形、精神科などがあった。</p> <p>3) ベッドは鉄製でマットレスはなくシーツや布団もなくゴザを敷いて使用している。医師も看護師も裸足でサンダルにマスクをつけている。患者受け付けは屋外で行う。</p>
3. 町の小学校での交流	<p>1) 国や文化が違っても日本にいる子どもと何ら変わりはない、何人かは靴を履いていない子どももいた。</p> <p>2) 言葉が通じなかったがダンスをして子どもたちの笑顔を見た、それ以上に私は笑っていた。</p> <p>3) みんな制服を着ていた。日本の小学生、中学生の間で流行っているアニメやキャラクターを紹介したが大変難しく伝えにくかった。日本のアニメはカンボジアでも人気があることがわかった。</p>
4. アキラ地雷博物館見学した学生の思い	<p>1) カンボジアの歴史から、地雷の恐ろしさや、これを作った人間の恐ろしさを知り平和への思いが高まった。戦争の悲惨さ残酷さを垣間見ることができた。地雷は実際に見ると怖かった。</p> <p>2) カンボジア軍とポルポト軍の戦争があったころ子供は道具のように使われていた。</p> <p>3) 地雷は人を殺すためではなくケガをさせて相手の戦力を弱めるためのものであった。</p>
5. CVSG子どもセンター	<p>1) 中学高校の研修生が40人程度、そのうち日本に来る人は20人程度で3年間。日本に行くために厳しく指導されている、私たちも日本のことを教え、質問に答えながら交流を深めた。</p> <p>2) 日本人はお金持ち、経済大国、楽園というイメージを持っている。</p>
6. 自立村の子どもたち	<p>1) 親と離れて暮らす子どもたちはお風呂もトイレもなく家畜(鶏、牛、犬)を育てながら生活をしている。</p> <p>2) 年長者が年少者の世話をしている。貧しくとも心豊かであるように見える。子どもたちの笑顔は日本の子どもよりキラキラしているように見えた。</p>
7. カンボジアの印象や驚き	<p>1) 食事や生活習慣に触れることで日本では体験できないことやカンボジア文化に驚くことができた。</p> <p>2) 原付車に最高5人は乗っている、バイクに乗るのに免許が必要ないことへの驚き。</p> <p>3) トンレサップ湖では船上生活を見ることができた。船が止まると近づいてお金をねだる子どもを見て驚き心苦しくなった。</p> <p>4) 安定した暮らしのままならぬ人々はまだまだたくさんいるこの国よりも、客観的にずっと豊かで安全な我が国のほうが自ら命を絶つ人が多いのはなんだかおかしい。贅沢ゆえの歪み放漫の結果かもしれない。</p> <p>5) 歴史で習ったアンコールワットを生で見られる日が来るとは思ってもみなかったのでも感動した。</p> <p>6) 青年海外協力隊に入り私の力でも多くの子供を救いたい。そのために最高の技術を身に付けた。</p> <p>7) 最初は戸惑いが多かったが次第に価値観が国それぞれにあり、これがこの国の当たり前だと思えば不思議と嫌悪感もなくなった。</p>

III. 研修報告会

参加者全員で今回のカンボジア・スタディツアーの学びと振り返りを行った。学生は口頭や記録でそれぞれの学びや思いを表した。内容は①初めての海外研修の体験について感激し、参加してよかった。②日本とカンボジアについて、想像していたものとの違いや語学の必要性などの共通認識ができた。学生は「国際交流活動」の科目単位取得に必要な記録「国際交流活動日誌」が提出された。また研修報告会后に、カンボジアの国において見聞したことを身近な人々に伝達する重要性を感じ、学祭やそのほかのイベントなどで、多くの学生が見えるポスターを作成した。

IV 考察

研修予定であった巡回診療視察は医師不在のため中止となり非常に残念であった。しかし町の小学校での交流や短時間ではあったが州立病院の見学ができたことはよかった。村の子どもたちとの交流が少なく残念であったが交流できる準備をして向かうべきであった。学生たちは医療についての関心が高く、巡回医療など期待していたことに参加できなかつたことは残念である。しかし、この度の研修が、今後の学生たちの成長を促し、国際社会において活躍する礎になることが期待される。また初めての海外に国際交流の一步が踏み出せた学生たちが今後、国際交流に関心を持ち続けてほしいと思う。

文献

- 1) 外務省 カンボジア基礎データ：<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/cambodia/data.html>, 2014.9.5.アクセス.
- 2) 木下照子, 小野晴子, 井関智美, 三上ゆみ：国際交流活動から得た学生の学びー2011年度カンボジアスタディツアー報告ー, 新見公立大学紀要, 33, 155-159, 2012.
- 3) 中山亜弓, 澤田由美, 谷野宏美：開発途上国との国際交流から得た学生の学びー2012年度カンボジア・スタディツアー報告ー, 新見公立大学紀要, 34, 205-210, 2013.
- 4) 中山亜弓, 木下照子, 谷野宏美, 明石俊子：開発途上国との国際交流から得た学生の学びー2012年度カンボジア・スタディツアー報告ー, 新見公立大学紀要, 32, 205-210, 2011.
- 5) 中山亜弓, 谷野宏美, 内藤一郎, 藤田小矢香：国際交流から得た学生の学びー2009年度カンボジア研修報告ー, 新見公立大学紀要, 31, 199-203, 2010.
- 6) 山内圭, 古城幸子, 岡宏美, 宇野文夫, 難正義：新見公立短期大学の国際交流・国際貢献, 新見公立短期大学紀要, 29, 143-150, 2008.
- 7) 岡宏美, 古城幸子, 川崎泰子：学生が行うカンボジアでの現地活動の新たな試みー2008年度カンボジア研修報告ー, 新見公立短期大学紀要, 30, 121-125, 2009.
- 8) 赤尾和美：この小さな笑顔のためにー日本人ナースのカンボジア奮闘日記ー, 朝日新聞出版, 2008.
- 9) 12月1日は世界エイズデー：http://www.worldvision.jp/news/news_0293.html 2014.9.5.アクセス.